

平城宮跡・平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部が、1989年度に実施した発掘調査は、平城宮跡内では、朱雀門、推定第二次朝堂院東第三堂・東門、推定兵部省地域、宮北面大垣の5件、平城京域内では、21件であった。以下、主要な調査の概要を報告する。

1. 平城宮跡の調査

朱雀門の調査（第201次、第211次）

朱雀門については、第16次、第17次、第112-113次と調査がなされ、規模が判明している。第211次調査では既発掘地もふくめた全体を発掘している。主な遺構は、朱雀門 SB1800、南面大垣 SA1200、東脇門 SB1801、西脇門 SB1802、下ツ道の西側溝 SD1900で、ほかに溝10条、塀2条、足場穴も検出した。

朱雀門 SB1800 掘り込み地業による基壇、礎石根石、礎石落とし込み穴、礎石、足場穴を検出した。基壇の掘り込み地業は、南端を新たに検出した。掘り込みの範囲は平均で、東西が約31.9m、南北が約16.6mである。第16次の調査所見と合わせ基壇の築成過程を復原すると以下のようになる。灰黒色粘質土の地山を1.5mほど掘り下げ、全面に河原石を敷きつめて地業の基礎とし、その上に版築を繰り返す。版築の単位は、底近くでは20-30cmほどあるが、上部では薄く、5-10cmである。版築がかなり進んだ段階で、柱位置の周囲に礎石の据え付け穴を掘る。据え付け穴は、側柱では長さ3-5m、幅2mほどの南北に長い掘形、棟通りの柱では一辺約2mの方形の掘形で、深さは検出面から約60cmある。据え付け穴の中に根石を置きながら、再び丁寧に版築を行い、最後に礎石を据え付け、版築を繰り返して基壇を完成させる。なお、地業の掘り込み部分からの排水のためと考えられる溝を検出している。

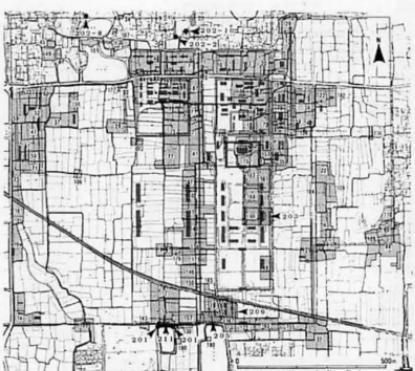
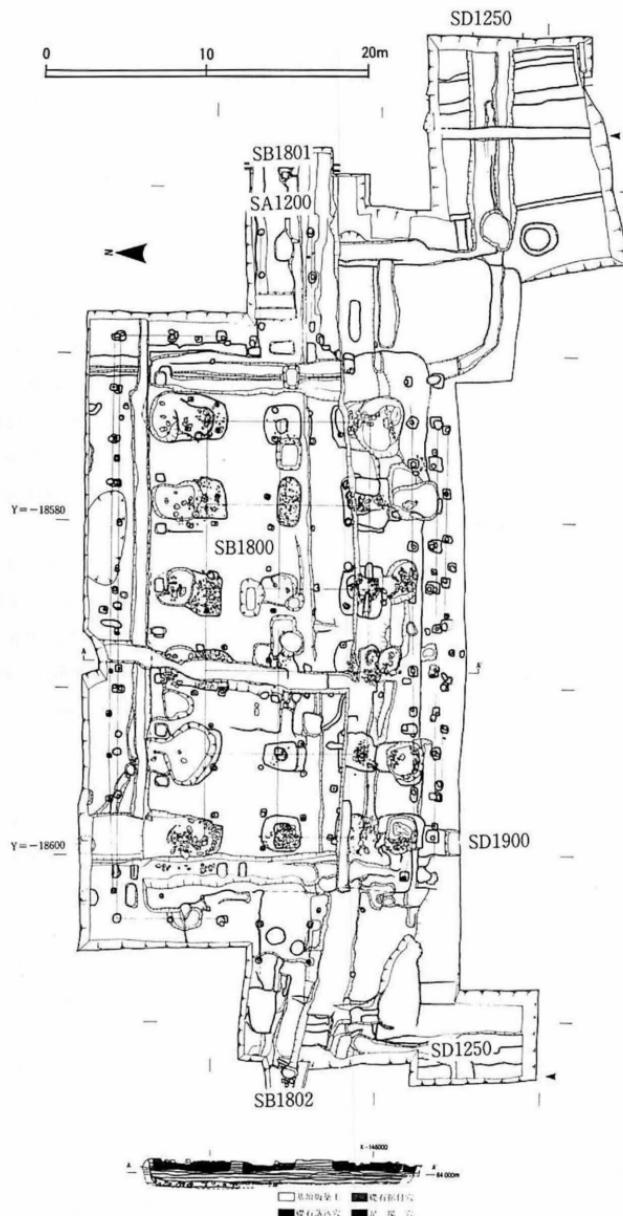


図 1989年度平城宮内発掘調査位置図

基壇の南3分の1は削平が著しいものの、南側柱列の根石が予想以上に残存していた。礎石据え付け穴は南半を直径2-3mの礎石落とし込み穴で壊されており、さらに礎石抜取り穴によって切られている。これらの穴の内5ヵ所から礎石やその破片を検出した。礎石の完存するものは直径1m以上あり、特別な加工は行わない。礎石を落とし込んだ時期や再度抜き取った時期については遺物が出土しなかったため明確にはし難い。

今回の調査では足場穴を新たに検出した。

基壇上の根石の周囲には、柱の四周を囲む形



朱雀門の調査（第201・211次）遺構図

の足場穴がある。礎石据え付け穴を切るので、基壇がほぼ完成し、礎石も据えた段階で足場を組んだものであろう。基壇の周囲では、建設時、解体時の足場穴を検出した。基壇南側の足場穴列のうち、朱雀門の東西妻柱と柱筋を揃える2柱穴の間隔は、24.8mである。これを朱雀門の桁行総長に読みかえると柱間寸法4.96mを得る。この値は、小尺で換算すると16.7尺と完数値を得られないが、大尺換算ではほぼ14尺という完数になる。

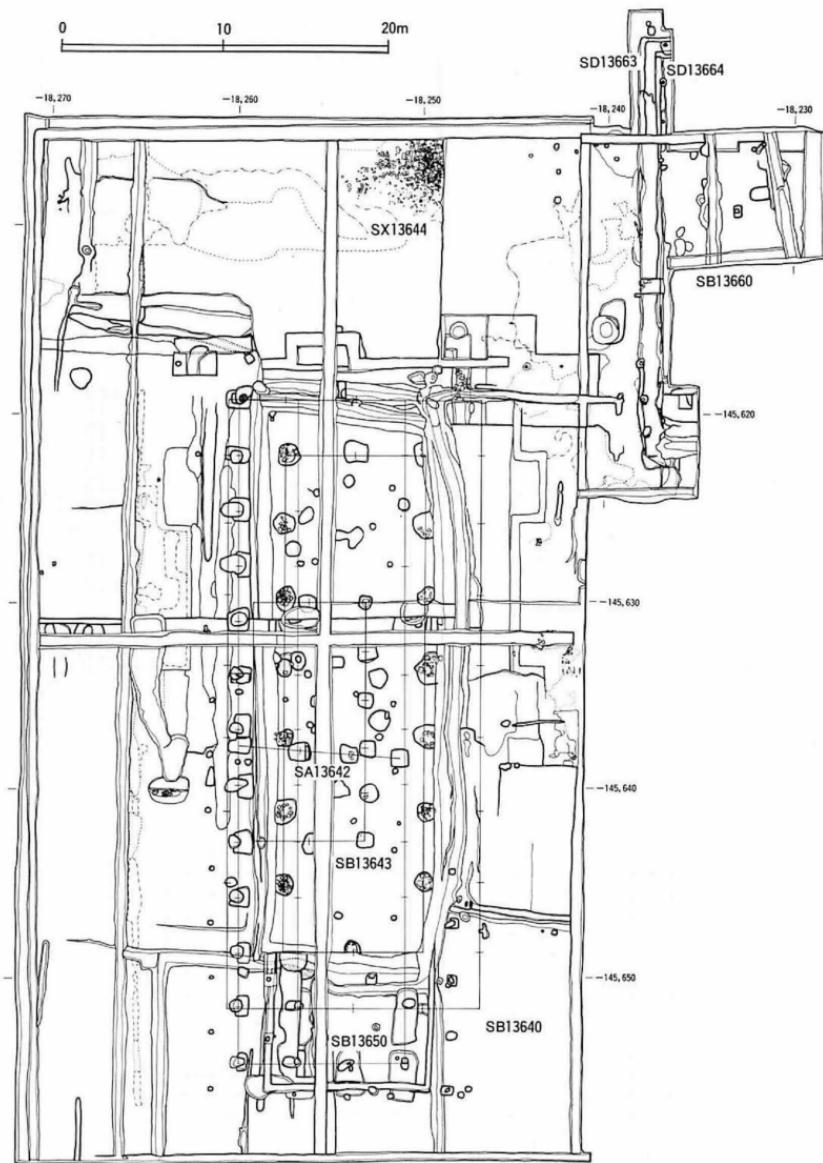
南面大垣 SA1200 朱雀門の東西で計25m検出した。北半部は第16次調査で既に確認しており、今回は南半部を新たに調査した。削平が著しく基底部がわずかに残るだけである。掘込み地業は、犬走りを含めて地山を約30cm掘り下げる。犬走りの部分は深い。地業の版築を行った後に築地本体の部分を掘り下げ、再び版築を行って築地を築成するという二段階の工程をとる。朱雀門基壇のすぐ東側で、築地の南北の添柱を2間分検出したがそれより東には延びない。同様の添柱列は門の西側でも検出している。掘込み地業の平面形はこの添柱の柱穴の周囲が突出する形をしているために第16次調査で築地の基底部幅が12小尺に広がるを見ていたが、今回の調査の結果では、南面大垣は朱雀門に取り付く部分でも基底部の幅が9小尺である可能性が高い。

第二次朝堂院東第三堂・東門の調査（第203次）

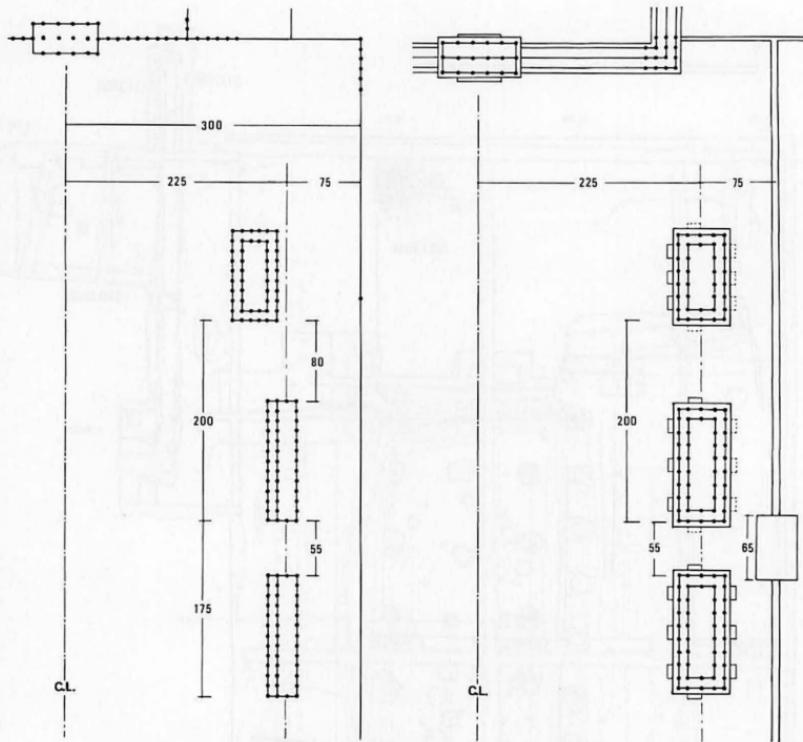
第二次朝堂院については、1984年度の第163次調査以来、継続的にその東半分を調査してきたが、今回は東第三堂と東門の調査を行った。その結果検出した主な遺構には、朝堂院東第三堂およびその下層遺構、第三堂廃絶後に設けられた掘立柱建物・塀などがある。調査地の層位は粘土質の地山の上に5世紀代から7世紀代の遺物包含層があり、その上を整地層が被っている。その厚さは調査区の西では0.3~0.4mだが、東に行くほど厚くなり調査区東端では2mを越す。

上層建物 SB13640 上層建物の基壇は残りが良く、現状で東西11m、南北29m、高さ0.6~0.8mあり、ほぼ身舎部分にあたる。基壇は下層建物の柱を抜取り、埋め戻した後、黄褐色の粘質土による粗い版築で築いており、掘込み地業は行っていない。基壇上に残る礎石の根石や礎石抜取り穴から、身舎は桁行7間、梁行2間であることがわかる。また、基壇縁や階段の位置からみて、四面に庇がつくことが確実である。したがって、全体規模は、桁行9間、梁行4間である。柱間寸法は、身舎桁行・梁行がともに約3.9m(13尺)、庇の出は3m(10尺)である。階段は、北面1ヶ所、東及び西面各2ヶ所に残る。北面階段は身舎西妻の間に合わせ、東西両面の階段は、中央間と2間おいた北の柱間に対応している。階段の規模はいずれも幅は13尺、基壇からの出は約1.2m(4尺)である。階段は本来、南面及び東西両面の南にも存在したと推定でき、もとは合計8ヶ所にあったものであろう。基壇外装および階段は、凝灰岩切石で築かれていたことが、散乱していた破片からわかる。基壇周囲は礎敷でごく一部が瓦敷である。SB13640は、東第二堂 SB11750と同一規模・平面である。

下層建物 SB13650 下層建物の大部分は上層建物基壇下に重複している。平面は、桁行12間、梁行3間で、西庇が付く形式であることがわかった。さらに雨落溝を北・東・西の三方で確認した。SB13650の造営は、詳細をみると次のような過程をたどる。(22頁図参照)。まず、一帯の

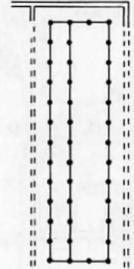
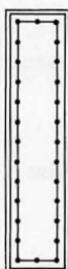
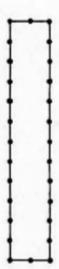


第二次朝堂院東第三堂・東門の調査（第203次）遺構図



第二次朝堂院位置図 左：下層，右：上層（単位は尺）

下層建物

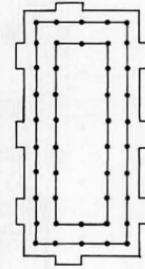


a

b

c

上層建物



東第三堂の変遷

盛土整地を行ったあと、建物部分をさらに層状に築成する。身舎部分の柱掘形を穿ち、柱を建てる(a)。次いで身舎の周囲に幅0.3mの細溝 SD13651をめぐらす(b)。その後、SD13651を埋め戻し、両側に基壇をつぎ足して西庇の柱掘形を掘り、最終的には西庇付建物として完成している。このようにSB13650は複雑な工程を示すが、これが、単に作業工程を示すものなのか、時期差とみて身舎だけで一端完成したものに、後に西庇を附加したものが問題となる。同様の平面の東第二堂下層建物SB12930では、このような工程は知られていない。

東門 SB13660 第二堂と第三堂との中間の東に、築地に開く門を検出した。基壇は削平され、礎石の痕跡も失われていたが、雨落溝 SD13661から、東門基壇の南北長は約65尺であることがわかった。SD13661は、本来は両側とも凝灰岩製の側石を備えていたと考えられる。

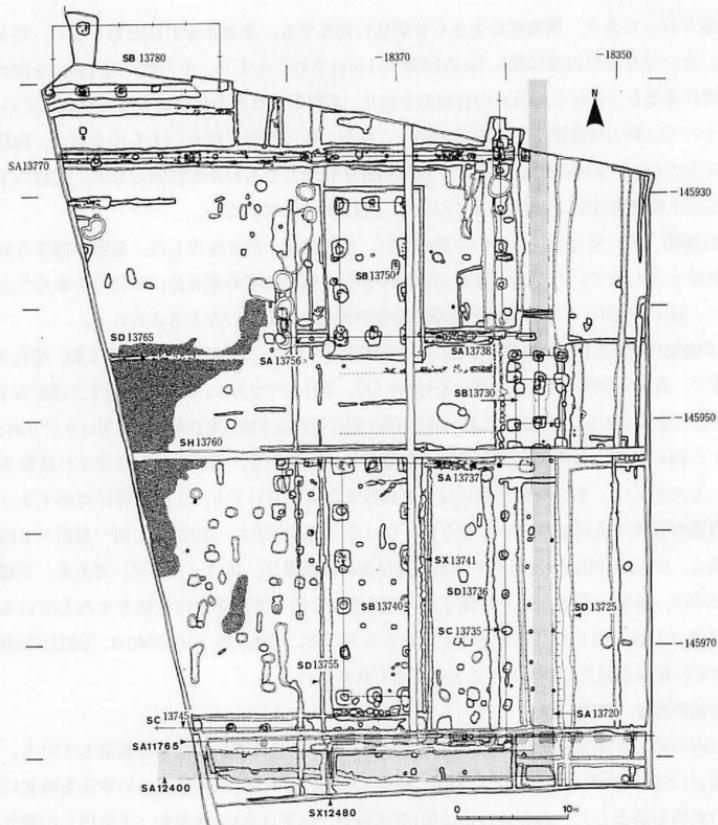
SB13640廃絶後基壇上に掘立柱建物1棟、塀1条が設けられる。建物SB13643は桁行5間、梁行2間の南北棟で、東半分が残存する。柱間は桁行約8.5尺、梁行10尺である。柱穴掘形出土土器から平安時代の建物と考えられる。塀SA13642は、方位が東で南に振れる4間の東西塀で、柱間は9尺である。

まとめ 今回の調査では東第三堂上層建物の下層に、東第一堂、第二堂と同様掘立柱建物を検出した。したがって、第二次朝堂院には、東第四堂以南においても、上層建物に対応する一連の下層遺構が存在する可能性がいっそう高くなった。SB13640は、SB12920と同一規模・平面で柱筋を揃え、SB12920南端とSB13460北端の柱位置間の距離は、16.5m(55尺)である。下層建物SB13650は、規模、平面形式、柱間寸法はSB12930と同じで、建物の柱筋をそろえている。両者の間隔は上層と同じく55尺である。これからみると、SB12920、SB13640は、SB12930南端とSB13650の北端を起点に計画したことが考えられる。

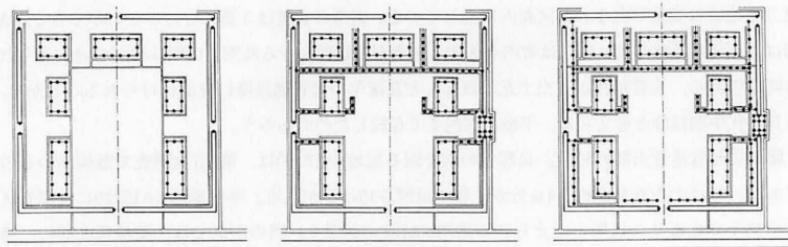
兵部省地域の調査（第206次）

壬生門内の第二次朝堂院地区において、門を入ってすぐの西側に兵部省を推定している。その北西部分は第175次調査で調査している。第206次調査では、兵部省推定地の中央を南北に通る市道の東側を調査した。調査地の南は第167次調査、南東は第122次調査（壬生門）の調査区と重複する。遺構の残存状況は、特に北半が極めて良好で奈良時代の地表面をとどめている部分がある。地山におおむね二層の整地が認められ、第一整地層は調査区のほぼ全域にわたり、第二整地層は築地で囲まれた区画内に施している。遺構の変遷は3期に分けることができる。A期は兵部省の造営当初、B期は省内を区画し東門が八脚門となる時期、C期は廊がつけ加えられる時期である。造営年代は、出土瓦はほとんど瓦編年の第Ⅲ期以降に位置付けられることから、奈良時代中期以降と考えられ、平城宮廃絶まで存続したのであろう。

A期 兵部省造営当初の時期。兵部省の南を限る築地SA12400は、第167次調査で既検出のものである。幅は犬走りを含め2.4m分が、積土は厚さ15ほどが残る。東面築地SA13720には調査区の中央やや北寄りに棟門と考えられる東門SB13730が開く。門の南側では、築地基底部に、積土のせき板止めの柱痕跡を10カ所で検出し、対になるものの内法を築地の幅とすると1.5m(5尺)となる。ただし、この柱は築地寄柱の可能性もあり、その場合は築地の幅は6尺となる。



第206次調査遺構図



A期

B期

C期

兵部省の変遷

築地で囲まれた中には、北側に 3 棟、南側の東南に 2 棟ずつの建物をコの字形に配する。いずれも低い基壇上に建つ礎石建物である。今回の調査区にかかったのは 3 棟である。

第一堂 SB13750 は、桁行 3 間、総長 11.9m、梁行 2 間、5.9m の南北棟。東第二堂 SB13740 は、SB13750 の南に柱筋をそろえて建つ、桁行 5 間、総長 20.7m、梁行 2 間、5.9m の南北棟。東側と南側で基壇縁石の痕跡を検出している。北方建物 SB13780 は、北側中央に位置する東西棟。SB13780 の西には、第 175 次調査で SB13000 を検出しており、東にも同規模の建物の存在が推定される。SB13750・SB13740 の西、SB13780 の南には疊敷の中央広場 SH13760 がある。東西長は建物基壇間の距離でおよそ 35m、南北長は SB13780 南方の溝と SA12400 との距離で 52.7m である。

B 期 SA13770 によって兵部省内を南北に区画するとともに、SB13780 の東西にも堀を設ける。また、SB13740・SB13750 と SA13720 の間を、SA13737・SA13738 でつなぐ。SB13750 の南妻柱筋から西側へは、西に 2 間、北に折れて 2 間の SA13756 がつけられる。SA13737 の西二間目は、玉石、凝灰岩切石、瓦片などで舗装して戸口とする。これらの堀の基底部はいずれも複雑な構造をしている。掘形に柱を立てた後に、土盛りを行ない、両側に溝を掘って、その溝の内側の肩に瓦片を一列に並べている。SB13730 を礎石建ちの八脚門に建て替える。桁行 3 間、中央間 3.9m (13 尺)、両脇間 2.1m (7 尺)、梁間は 2.1m (7 尺) の等間である。

C 期 SA12400 では推定南門の東西内側各 4 間に、礎石建ちの翼廊 SC13745 を設ける。礎石は上面が平坦な自然石で長辺 60cm、短辺 40cm。柱間は 3.3m (11 尺)、築地心よりの出も 3.3m (11 尺) である。廊の軒の出は、雨落溝の位置から 1.5m (5 尺) に復原される。SH13760 の南北長が SA13770 と SC13745 矩石との心心距離で 50.7m となる。東面でも SA13720 の内側に礎石列を検出し、東側では東門前を除いたすべての部分に廊 SC13735 が及ぶことがわかった。礎石は南面と同様、上面の平らな自然石で、柱間・築地心からの出も南面と同じく 3.3m (11 尺) である。廊の礎石の間には一部に瓦列の地覆が残存しており、柱間を壁ないし連子窓で閉ざしている部分があることを示している。廊柱心の西 1.2m (4 尺) に、廊の西雨落溝 SD13736 がある。

兵部省の調査で出土した軒瓦をみると、軒丸瓦 6282G-軒平瓦 6721F のセットがもっとも多く、軒丸瓦 6225C-軒平瓦 6663C のセットがそれに次ぐ。このうち軒丸瓦 6282G-軒平瓦 6721F のセットは今のところ兵部省独自のセットとみることができる。

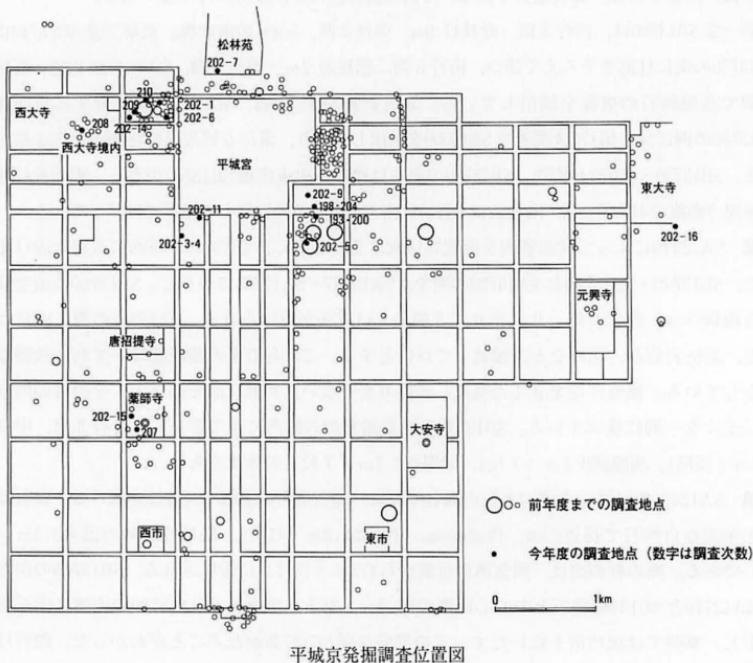
今回、調査区の下層から、掘立柱東西堀 SA1765 を検出し、第 16 次、第 122 次、第 157 次、第 167 次の調査結果と合わせて、SA1765 が朱雀門から壬生門の西まで至っていることが明らかとなつた。柱間は 9 尺で、掘形は東西 1.5m、南北 1m の長方形である。

宮北面大垣の調査 (第 202-8 次)

第 164-1 次調査で検出した掘立柱堀の西への延長線上にあたる部分を調査したが、相当する遺構は検出できなかつた。釣り殿神社の西にのびる東西方向の里道は北面大垣の遺存地割りと考えられ、それが今回の調査区の北を通ることから、御前池が築かれる以前の谷筋中央部付近で大垣が北に振れていたことが推定できる。

(森本 晋)

2. 平城京跡の調査



左京二条二坊五坪と二条大路の調査（第198次 B・C 区, 200次補足, 202-9・13次, 204次）

1986年9月30日から始まったそごうデパート建設に関連する発掘調査も、第204次調査を最後にして1989年9月6日に終了した。これまでに実施した調査は10次にわたり、総面積は31, 400m²におよぶ。本年度の調査では、第198次B区・同C区・第200次補足・第204次・第193次F区の5箇所の発掘区を設定した。昨年度までは、おもに平城京左京三条二坊一・二・七・八坪を調査してきたが、本年度は主として、その北方の左京二条二坊五坪と二条大路北半部を調査の対象とした。また、べつに左京二条二坊五坪の東辺（第202-13次）と北辺（第202-9次）でも調査しており、あわせて報告する（第193次F区のみ別項で報告）。発掘調査で検出した遺構はじつに多彩であり、以下のようなA~Gの7期にわたる複雑な変貌をとげている。

A期 (奈良時代初頭) 五坪の南面・東面を築地塀 SA5245が画す。宅地内の築地雨落溝は、南面では SD5246、東面では SD5031が流れる。五坪の中央東寄りに掘立柱建物 SB5270・5280がたつ。SB5270は3間×3間の倉庫風建物である。SB5280は東妻4分間のみを検出した。

B期（奈良時代初頭） 五坪の建物に変化はないが、二条大路と東二坊坊間路の各側溝がつくりかえられ、築地塀には軒瓦が葺かれる。西側溝は、SD5240の南にSD4699が新設され、SD5021と一緒にとなる。そして北側溝SD5240・南側溝SD5150は、SD4699以東を埋めたてる。

C期（奈良時代前半～中頃） 五坪内では、中央北寄りにSB5400を、東辺部に長大な南北棟建物SB5250を配置する。遅くともこの時期には、五坪南面築地塀の中央に、掘立柱の一間の門SB5315が二条大路にひらく。門の東北には建物SB5330を配置し、築地塀の北雨落溝をSD5244につけかえる。SB5250は梁間4間、桁行20間以上の東西両庇付南北棟で、南妻から6間めと12間めに間仕切りがある。柱間寸法は、梁間が10尺、桁行が8尺で、庇の出は東が8尺、西が9尺である。柱穴には、建築部材を転用した礎板をともなうものが多い。

この時期が終わるころ、二条大路の南・北の路肩に濠状の東西大溝SD5100・5300・5310が掘られ、大路の幅は約29mとなる。南側のSD5100は幅2.6m、深さ0.9m、北側のSD5300・5310は幅2～2.3m、深さ0.9mである。SD5300は東が東二坊坊間路、西が五坪中央の門の手前で途切れるが、門の西では、SD5310がSD5300とほぼ対称をなして西に延びている。これらの溝は、木層層内に木簡のほか大量の遺物をふくみ、その出土状況と木簡の年紀から、天平十二年（740）前後の掘削後、短期間のうちに埋没し、遺物が一括して捨てられたことが推定できる。

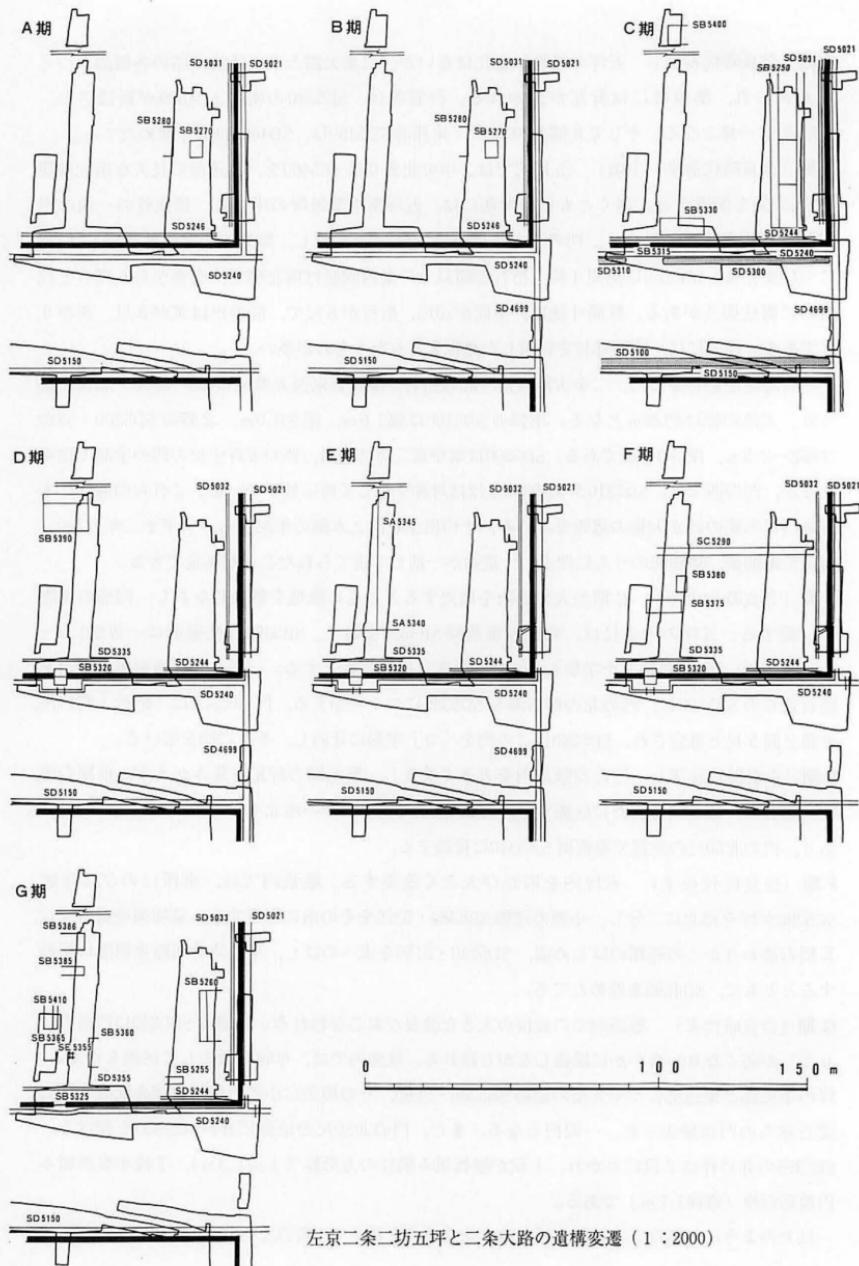
D期（奈良時代中頃） C期の大型建物を撤去するとともに敷地を整地しなおし、内部の建物を一新する。五坪の中央には、北庇付東西棟SB5390をおく。SB5390の柱掘形は一辺が1.5～2.0mもあり、底に角材を十字形もしくは一文字に据え礎板とする。一方、五坪南面築地の門を礎石建ちのSB5320に、門の北の雨落溝をSD5335につけかえる。門SB5320は、桁行1間14尺、梁間2間9尺と推定され、SD5240はこの門を「コ」字形に迂回し、そこに橋を架ける。

E期（奈良時代後半） 三たび敷地内を大きく改変し、築地塀の軒瓦も葺きかえる。前期の建物は撤去し、敷地内を新たに区画する。南北塀SA5345は五坪の南北中軸から東に20尺の位置にあり、門の北50尺の位置で東西塀SA5340に接続する。

F期（奈良時代後半） 五坪内を四たび大きく改変する。敷地内では、東西にのびる单廊SC5290が坪を南北に二分し、小型の建物SB5380・5375をその南に配置する。条坊関連遺構では、E期の終わりからこの時期のはじめ頃、SD5240・5150を東へのばし、東二坊坊間路東側溝に接続するとともに、SD4699を埋めたてる。

G期（奈良時代末） 敷地内での最後の大きな改変がおこなわれる。北側溝SD5240は門前のはりだしが弱くなり、緩やかに屈曲しながら流れる。敷地内では、单廊を撤去して区画をかえる。坪の中央部と東辺部にやや大型の建物SB5386・5260、その周辺に小型の建物数棟を配置する。礎石建ちの門は撤去され、一間門となる。また、門の北50尺の位置に井戸SE5355を設ける。SE5355の井戸枠は2段にわかれ、上段が横板組み隅柱の方形枠（1辺1.3m）、下段が竪板組み円筒形の枠（直径1.5m）である。

以上のように、左京二条二坊五坪では、奈良時代を通じて1町以上の敷地を利用しておらず、C



左京二条二坊五坪と二条大路の遺構変遷 (1 : 2000)

期以降は二条大路に門がひらいていたことがあきらかになった。奈良時代前半については、SD5300から「中宮職移兵部省卿宅（略）天平八年八月二日付舍人刑部望麻呂」という記載のある木簡（後出）や「兵部卿宅」と書かれた墨書き土器が出土しており、五坪は兵部卿藤原麻呂の邸宅として利用された可能性が大きい。奈良時代後半になると、多数出土した軒瓦や、桁行2間以上の長大な建物に象徴されるように、五坪はより官衙的な色彩をおびていたものと想像される。かりに官衙でないにせよ、この一郭をふくむ平城宮東院南方遺跡のイメージは、一般的の京内宅地とはかなり異質であるといってよい。

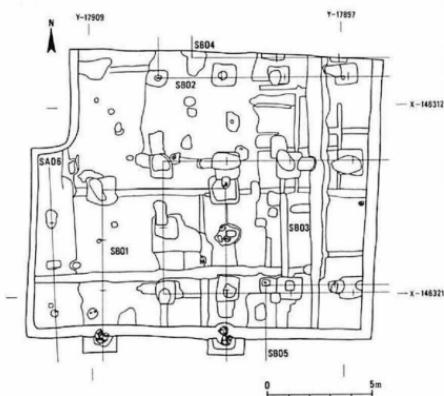
左京三条二坊八坪の調査（第193次F区）

本調査では、「長屋王木簡」溝SD4750の北端を確定し、溝を完掘した（約55m²）。SD4750は、幅2.4m、深さ0.9mあり、総長が2.7mと判明した。出土した木簡は、木簡溝全体で4万点以上にのぼる。

左京三条二坊六坪の調査（第202-5次）

店舗付住宅建設とともに事前調査である。調査地は、平城京左京三条二坊六坪にあたり、東側に隣接する特別史跡平城京左京三条二坊宮跡庭園と同一の宅地と考えられる重要な場所である。検出した遺構は、礎石建物1棟、掘立柱建物4棟、掘立柱塀1条、溝7条以上である。建物は柱穴の切合い関係などから、A～Cの3時期に分けることができる。

A期（奈良時代前半） 磂石建物SB01と掘立柱建物SB02を設ける。SB01は、根石の残存するところが3箇所、根石の抜取り穴が1箇所で検出されたにすぎないが、おそらく3間以上×2間の南北棟であろう。なお、北妻の両隅柱の北には掘立柱の柱穴がならび、庇か縁などSB01に付随するものと思われる。SB02は調査区の北端で検出した柱穴列で、東西に3間分ある。宮跡庭園内で検出したSB1571の南側柱の西延長にあたる。



第202-5次調査遺構図



第202-5次調査区と「宮跡庭園」の遺構変遷

B期（奈良時代後半） 東西棟の掘立柱建物 SB03がこの時期に属す。2間×3間以上の規模をもち、宮跡庭園内で検出されたSB1574の西延長にあたる。両者は一体の建物であろう。

C期（奈良時代末期） 掘立柱建物 SB05がこの時期に比定される。調査区東南隅で、2個の柱穴がみつかっており、南北棟北妻の棟通柱と西隅柱であろう。

右京三条一坊十五坪の調査（第202-3・4次）

集合住宅および店舗建設にともなう事前調査である。両調査地は位置が接近しており、右京三条一坊十五坪の西南部分にあたる。

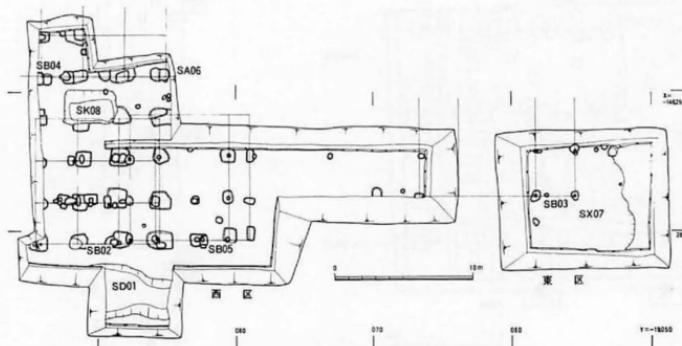
第202-3次調査 東区は面積が192m²あり、十五坪の中央やや南より、西区はその西約22mのところに位置し、面積が15m²である。西区はとくに取り上げるべき遺構はなかった。東区の奈良時代の遺構としては西半部で柱穴を7個検出したのみである。

第202-4次調査 面積は東区が72m²、西区が185m²である。おもな検出遺構は、奈良時代の掘立柱建物4棟、掘立柱塀1条、溝1条、流路1条で、以下の3時期にわたる変遷を遂げている。

A期 東西溝 SD01は調査区の南縁に位置し、自然流路と考えられる。堆積土中からは奈良時代初期の須恵器・土師器が出土しており、その頃に埋められたものである。

B期 SD01を埋めたて、坪を宅地として利用する。建物 SB02・03・04がこの時期に属し、さらに2時期に細分できる。SB02とSB03は柱筋をそろえており、同時期とみなせるが、SB04は時期を異にする（前後関係は不明）。総柱建物 SB02は3間×3間で、柱間寸法はそれぞれ10尺（3.0m）等間である。SB03は東区と西区にまたがって検出した南北棟建物。SB04は、SB02と同じ柱間寸法をもち、SB02と同規模・同構造の建物とみなせる。

C期 SB02・03・04が廃絶し、SB03の跡には流路状の窪地をつくる。西側では、建物 SB05、東西塀 SA06を建てる。SB05は3間×4間の南北棟建物で、東西に庇がつく。SB05の北妻柱から北へ3.0mの位置で SA06がとおり、その柱間はほぼ10尺（3.0m）等間である。流路状の遺構



第202-4次調査遺構図

SD07は、東岸のみ検出した。出土須恵器から奈良時代後半期の遺構とみられる。（浅川滋男）

3. 平城京内寺院の調査

薬師寺東面回廊の調査（第207次）

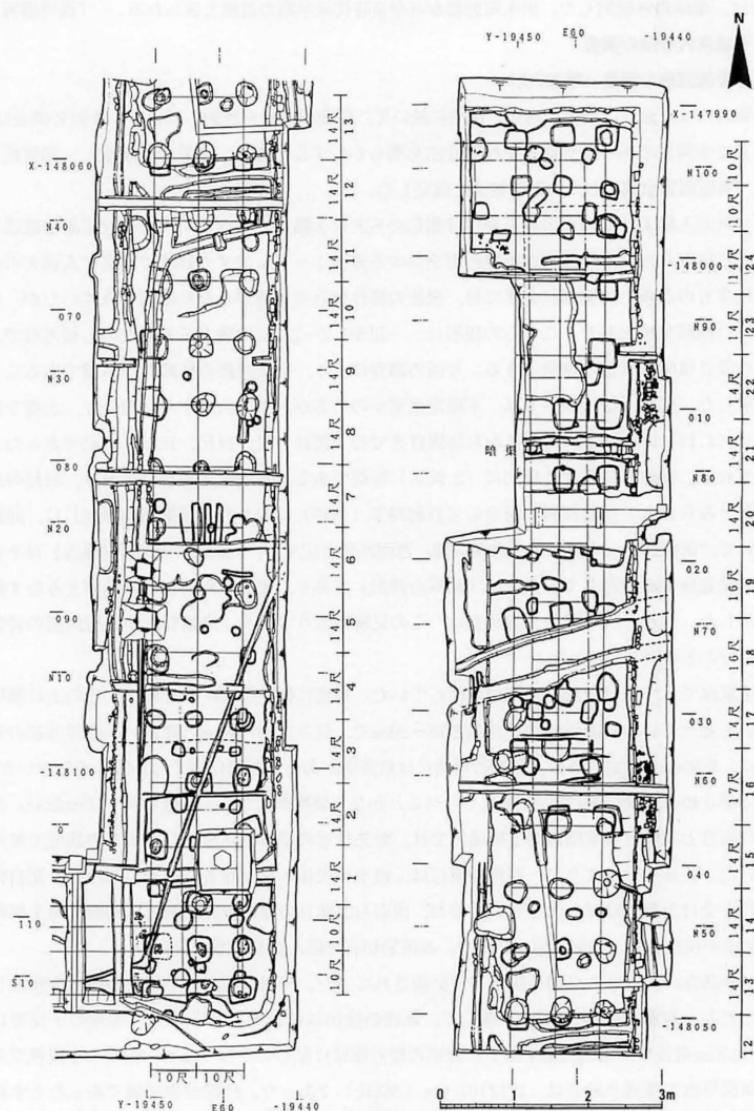
薬師寺では、金堂、僧房、西塔、中門に統いて、回廊の再建を計画している。今回の調査は、これまで未解決であった柱間数や柱間寸法を明らかにするために、以前の調査地と一部重複させて、東面回廊全域にわたる調査範囲を設定した。

複廊 東南入隅より3間目の礎石据付け掘形から北東入隅まで、ほぼすべての柱位置を確認した。礎石抜取り穴は、平面形が不整円形を呈する直径1~2mのすり鉢状で、底に入頭大の根石を残すものが多い。発掘区北半では、後世の耕作行為で遺構がかなり破壊されていたが、礎石据付け掘形を検出した。これらの掘形は、一辺が1.2~2.0mの隅丸正方形ないし長方形で、本来の深さは60cmほどに復原できる。今回の調査により、東面回廊の柱間数が24間であることが確定した。柱間寸法については、不確定要素がのこるが、東南入隅から15間分と、北端5間が14尺（4.14m）等間で、16間目から19間目までの4間は17尺、14尺、16尺、16尺であったと推定される。梁行の柱間寸法は10尺（2.96m）等間である。基壇幅は約10.1mあり、34尺の計画寸法とみられる。伽藍復興を記念して長和四年（1015）に著された『薬師寺縁起』は、回廊について、南面20間、北面16間、東面24間、西面25間と記すが、『薬師寺発掘調査報告』はそれ以前の発掘成果を検討して、東面は「転写の誤記」であり、東面・西面ともに25間とみなす解釈を示した。しかし、今回の発掘調査は、この見解が誤りであり、東面回廊が桁行24間の建物であったことを明らかにした。

基壇東縁では、ほぼ全域に外装が遺存していた。基底に偏平な自然石を置き、その上に凝灰岩切石を並べている。凝灰岩切石は高さ15~20cmで、長さは30~90cmと細長い。造営当初の基壇高は、約90cmと推定される。基壇の両側には雨落溝がある。西側は浅くしか残っていないが、東側は深さ40cm、幅150cmで、西側とくらべるとかなり規模が大きく、溝底は40~70cm低い。南から17間目と22間目の東雨落溝上層周辺では、軒先付近の屋根瓦が落下したままの状態で埋没していた。注目すべきことに、瓦堆積層には、焼土や炭化木材が顕著に認められたが、瓦自体が火熱を受けた形跡はほとんどない。なお、南から21間目のほぼ中間位置で、回廊基壇を横断する暗渠を検出した。内側の幅は45cmで、凝灰岩切石を組んだものである。

单廊 薬師寺の回廊は、当初单廊として計画されていた。今回の調査でも单廊の遺構を検出した。ただし、複廊遺構の保存を考慮して、单廊の検出は部分的にとどめた。掘形の平面形は70cm×150cm前後の不整梢円形を呈し、複廊の礎石据付け掘形にくらべると、かなり小規模である。東面单廊の棟通り総長は、ほぼ107.6m（363尺）であった。柱間が等間隔であったとすれば、单廊は桁行28間（両隅をのぞく）で、その柱間寸法は約3.71m（12.5尺）となる。

回廊の変遷 『薬師寺縁起』によれば、天禄四年（973）の大火で四面廊は焼亡したとある。また、永長元年（1096）と康安元年（1316）に地震による回廊の倒壊を記す史料もある（『中右



注) 座標値のうち X, Y は国土方眼座標系 S, N, E は薬師寺座標
薬師寺東面回廊遺構図 (1 : 400)

記』および『嘉元記』)。落下した屋根瓦をみると、創建瓦のほかに、天禄の火災後の再建のために作られた軒瓦も多少混じっているが、天禄再建瓦より新しいものはない。さらに東側の雨落溝下層からは10世紀末～11世紀の土師器、同じく落下瓦をふくむ上層からは12～13世紀の瓦器が出土した。おそらく、下層が天禄の火災～再建の時期、上層が倒壊～廃絶の時期に対応するものとみられる。また、溝上層の落下瓦はあきらかに建物の倒壊によるものであり焼土や炭化材をふくむので、火災による倒壊の可能性が大きい(ただし、この時期の火災を示す史料はない)。以上だけでは結論を下しがたいが、奈良時代のはじめに完成した複廊は、①天禄四年(973)の火災後再建されたが、②東面回廊は12～13世紀頃に火災で焼け落ち、③焼け残った回廊建物は14世紀半ばの地震で倒壊し廃絶した、という変遷を推定できる。

西大寺境内の調査

1989年度の防災工事にともなう発掘調査である。古墳時代から近世まで、いくつかの遺構が検出された。西大寺造営以前の平城京の遺構には掘立柱建物1棟、素掘りの溝2条、井戸1基、沼地などがある。西大寺創建時の遺構は、西塔の掘込み地業である。この地区的調査は昭和30年に実施されており、今回はその一部を再発掘した。地業は八角形で、北東辺が深く(残存部深さ約0.9m)、底に人頭大の石をならべその上を版築している。

西隆寺旧境内の調査(第209・210次)

百貨店改築にともなう事前調査である。第209次調査区は右京一条二坊十坪の西隆寺金堂の東側、第210次調査区は西二坊坊間路と北一条大路が交差する位置にあたり、西隆寺旧境内の東北隅をふくむ。第210次調査区は秋篠川の旧流路にあたり、遺構面がおおきく浸食されていたが、第209次調査区では、西隆寺の東面回廊をはじめ、以下のような各時期の遺構を検出した。

A期(古墳時代の遺構) 発掘区を斜めに横断する大溝SD350のほか、数条の斜行溝を検出した。これらの斜行溝は水田に関わる灌概施設と推定される。

B期(奈良時代前半の遺構) 検出した掘立柱建物は桁行柱間数を3間とするものがほとんどで、柱間寸法は6尺前後、柱の穴も小さい。2基の井戸のうち、西南隅のSE353は井戸枠が抜き取られているが、SE370は井戸枠を残している。昭和46年の調査によると、西隆寺造営以前には坪境小路が通り、十坪が1町以下の占地であったことが判明している。また同時に、十坪のほぼ中央の塔下層では、南庇付きの大規模な建物を検出した。今回の調査区では、坪内を分割するような遺構はみられず、十坪は1町占地で、検出した建物は敷地内の雑舍群と考えられる。

C期(西隆寺の遺構) 西隆寺造営時の整地層で東面回廊を検出した。基壇土は削平されて遺存せず、回廊に係わる遺構は礎石据付け穴、西雨落溝底の瓦堆積、暗渠である。回廊は複廊で、礎石据付け穴は3列ならび、桁行方向に19間分を検出した。桁行柱間寸法は10尺等間であるが、南から8間目のみ8尺と狭い。梁行方向の柱間寸法は、8尺等間である。西雨落溝はほぼ底面まで削平されていた。暗渠は底石に拳大の偏平な川原石を並べ、側石に凝灰岩をたてて、底面は東へ向かって低くなる。西端に川原石の底石と上面をそろえて凝灰岩を据えており、底石の

並びかたがかかる位置が基壇端で、西側柱心からの基壇の出は4尺と推定される。

以上の成果から、西隆寺中心伽藍の規模がほぼあきらかになった。金堂と東回廊の中心間距離は130尺あり、したがって東西回廊の心々距離は260尺に復原できる。ただし、東面回廊が西へ曲がる地点は検出していない。回廊は金堂にとりつかず、元禄十一年（1698）の「西大寺伽藍絵図」にみえるように、おそらく講堂にとりついていたのだろう。なお、絵図には東面・西面回廊のほぼ真中に「樂門」が描かれているが、門の位置を確定することはできなかった。

東大寺南大門の調査（第202-16次）

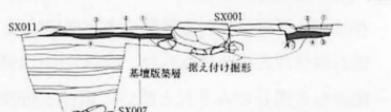
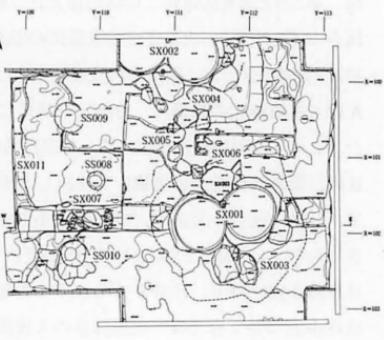
東大寺南大門金剛力士像のうちの吽形像の解体修理にともなう地下調査である。遺跡の基本層位は、上面から第1層は厚さ約2~3cmの白色砂質土（現代）、第2層は厚さ5~10cmの褐色砂質土のたたき層（江戸時代）。第3層は厚さ約5cmの褐色土で、非常に固く締めかためられている。奈良時代ほか古代の瓦片が少量出土した。第4層以下は、基壇築成時に順次版築された土層で、現基壇上面から約120cm下層に基壇の基礎地業として径約10~30cm大の自然石を敷き詰め、その上に砂質土・粘質土を版築によって互層に積み上げる。第4層以下では、遺物が出土しなかった。検出した遺構は、吽形像の台4石（SX001・002）と、これをとりまく岩座の台石7石（SX003・004）、像の足元をつなぐように遺存する人頭大の石列（SX005）とその直下の円碟敷（SX006）、基壇基底部の石敷（SX009）、そして門の創建か修理にともなう足場穴（SS008・009・010）などである。

調査の成果をまとめると、以下のようになる。

① SX001・002の吽形像台石は、第4層以下の基



第209次調査遺構図（1:800）



東大寺南大門基壇および吽形像台石平面図・断面図（1:80）

壇版築層の築成後に据えつけた。その後、第3層を石際まで敷均して版築で締めかため、基壇面とした。②像の足元まわりの岩座を支える台石（SX003・004）7石のうち、4石は第3層築成と同時に据えられているが、他の3石は据直しなどの補修を受けている。補修の時期は、堀形から出土した寛永通宝によって江戸時代以降に比定できる。③SX005は、浮動沈下した基壇上面と、像両足の爪先を支える角材下面との間に埋められた玉石である。堀形から文久永宝が出土しており、施工時期は江戸時代末～明治時代に比定できる。なお、現状では、第3層上の吽形像台石SX001・002が、奈良時代当初のものか、鎌倉時代の門再建時に据えなおされたものかを確定することはできない。ただし、奈良時代寺院の門脇間に安置された仏像は一般的に塑像であり、その台石には心木をうける枘穴をもつことが必要である。しかし、SX001・002に枘穴はなく、その点で奈良時代の塑像台石としての可能性は低いといわざるをえない。この課題の解明は、阿形像解体修理にともなう地下調査に待ちたい。

（浅川滋男）

1989年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査一覧

調査地区	遺跡・次数	調査期間	面積	備考
6ABY	平城宮 第201次	89.4.17～89.5.20	140m ²	朱雀門
6AAU	平城宮 第203次	89.6.5～89.11.27	1800m ²	第二次朝堂院東第三堂・東門
6ABL	平城宮 第205次	90.1.8～90.6.8	1700m ²	兵部省
6AAY	平城宮 第206次	89.10.13～90.4.27	2700m ²	兵部省
6ABY	平城宮 第211次	90.1.23～90.4.24	1100m ²	朱雀門
6ABN	平城宮 第202～2次	89.5.15～89.5.22	25.5m ²	大膳職地区北方
6ASA	平城宮 第202～7次	89.6.26～89.7.1	60m ²	平城宮北方遺跡
6ACA	平城宮 第202～8次	89.7.19～89.7.26	30m ²	平城宮北面大垣推定地
6ABN	平城宮 第202～10次	89.10.23～89.10.25	24.7m ²	大膳職地区北方
6AFI	平城京 第193次 F区	89.5.16～89.5.29	55m ²	左京三条二坊八坪
6AFF	平城京 第198次 B区	89.4.1～89.5.16	880m ²	左京二条二坊五坪
6AFI	平城京 第198次 C区	89.5.8～89.5.15	40m ²	左京三条二坊八坪
6AFI	平城京 第200次補	89.7.11～89.7.15	40m ²	左京三条二坊八坪
6AFF	平城京 第204次	89.7.25～89.9.6	870m ²	左京二条二坊五坪
6BYS	平城京 第207次	89.7.3～89.9.30	1213m ²	薬師寺東面回廊
6BSD	平城京 第208次	89.8.7～89.10.3	300m ²	西大寺境内
6BSR	平城京 第209次	89.9.28～89.11.29	1800m ²	西隆寺旧境内
6BSR・6AGA	平城京 第210次	89.11.20～89.12.12	560m ²	西隆寺旧境内
6AGA	平城京 第202～1次	89.4.24～89.5.9	80m ²	右京一条二坊八坪
6AGF	平城京 第202～3次	89.5.15～89.6.8	192m ²	右京三条一坊十五坪
6AGF	平城京 第202～4次	89.5.22～89.6.29	257m ²	右京三条一坊十五坪
6AFI	平城京 第202～5次	89.6.7～89.7.7	215m ²	左京三条二坊六坪
6AGA	平城京 第202～6次	89.6.9～89.6.17	50m ²	右京一条二坊二坪
6AFF	平城京 第202～9次	89.9.16～89.10.2	75m ²	左京二条二坊五坪
6AGF	平城京 第202～11次	89.11.27～89.12.18	230m ²	右京三条一坊九坪
6BFO	平城京 第202～12次	90.1.9～90.1.11	15m ²	法華寺旧境内
6AFO	平城京 第202～13次	90.1.29～90.3.3	180m ²	左京二条二坊五坪
6BSR	平城京 第202～14次	90.2.20～90.3.9	130m ²	西隆寺旧境内
6BYS	平城京 第202～15次	89.8.25～89.8.28	9.4m ²	薬師寺北門推定地
6BTD	平城京 第202～16次	90.1.16～90.2.4	15m ²	東大寺南大門